「やまとことば」の教材化

宮　田　暉　朗

はじめに

現今、言葉は伝達機能の手段にとどまってしまい、肝心の気持ちを伝え人間関係を形成するという本来の目的が先細りになってきている。昭和30年代から始まる所得倍増は結果的に金銭価値を換算する拝金主義を生み出し豊かさのつけとして精神の不安感をもたらした。結果、単語を並べているだけで一時間話す中学生や高校生や若者によって、ことばの簡略化とファッション化がすすんだ。その根底には広がる不安感への対応策としての帰着であった。この現象は当然人格の切捨てにつながる。このような若者に雅語を教材にした学習を通して、美しい言葉の奥にある心情を五感で享受することを願うのが本稿の主旨である。「屋満と言葉」という江戸時代の往来ものの教科書である縦18.5センチ、横12センチの和とじ本（貴族の扇投げと牛車の図の版画も入っている。）をもとにして歌詞を教材化してのアプローチがこれである。

それは、人間機能復活のために、二で述べる「やまと言葉」の歌詞の意味を理解し、枕詞や和歌を集め、和歌を創作する等の一連の学習を仕組み、この過程で、やまと言葉を通して古典に遭遇し、声に出して読むことによって豊かな気持ちを共有し、「ひたる」という学習への質的変換である。感受性の強い中学生が雅語に触れて、言語文化の源流に遊ぶことで、日本人のものの考え方と美の受け止め方を学ぶと共に和歌を作ることを通して日本人の雅俗を極める精神生活を追体験させる試みである。

これらの学びは、寺子屋では、師匠が書き与えた手習いが終わると、次の段階は、「屋満と言葉」を含めて、内容のある往来ものの板本の教科書である庭訓往来、実語教や女大学、商売往来などに進んだ。これらの板版教科書が明治維新から３年までの教科書であり、工夫されて「うひまなび」「智慧の輪」「ちゑのいとぐち」「単語編」に

発展する。ついで、同6年の単語読本、連語篇、会話篇、小学読本の発刊を促し、7年に文部省が小学入門、小学綴字書を発刊して新国語教科書の基盤がなる。従って明治時代の国語教育にも触れることにもなり、さらに、国学についてもあわせて学習できると、いっそう雅語についての理解が深まることが期待できる。

国語教室はもちろん、クラス作りの一環として春夏秋冬の経過の中で年間を通して行うことが望ましい。

一　冊子「屋満と言葉」とその記述

「屋満と言葉」という冊子は、例えば、上の段に「雲井の月」と書くと下段には「心徒くしの事」と意味が書かれる。同様に上段に書かれる「ゆふつけとりとハ」は、下段に「あかぬ王かれ可なしき事」と意味が記述されている。

① 万葉仮名で記載されているが、万葉仮名の記述はできないので、もとになる漢字をそのまま書くことにする。満は「ま」、春「す」、須（す）、免「め」、幾「き」、記（き）、見「み」川「つ」数「か」、可「か」、記「き」、流「る」多「た」奈「な」盤（は）、者（は）、於（お）、天（て）などの通りである。

② 濁点についてであるが、例えば、春（濁点）という記述は「ず」と読む。

③ 和語の語尾についている「とハ」は二番目から省略した。

④ ＊は枕詞を指す。0印は枕詞の語幹であることを示す。

雅語をぜんぶ記載できないので割愛したものも多い。

⑤ ことばの解説はすべて「古語辞典」金田一京助監修　三省堂によった。

二　やまと言葉と表記の背景についての指導

やまと言葉は外国語に対していう言葉であり、辞書的解釈では、日本語、和語、主として和歌に用いる雅語、女房詞に分類され、その特色は土のにおいと同時に極めて高尚な雅の響きも共有する。それは、農耕漁業製造生活者の縄文、弥生人は繊細な感性をもって話し聞く言葉である和語を創造したからである。さらに、日本語を漢字で表現しようとした時代は、エネルギッシュな古墳時代であり国の草創期という桁外れな活力のある時代下にあり、それを日本語に翻訳するに当たって、漢字の持つ力強さ

の構造を生かすと共に、伝統である和語の柔らかいトーンと風合いを薄めずに日本語を創作したことが大きい。そこに、仮名の発明が和語のふうあいを強く保持したからである。

日本に漢字が書かれたモノが入ってきたのは縄文時代からであるといっていいが、移入者や帰化人の威信財でしかなく、文字を使う習慣がなかったのですぐとり入れられなかった。その後、国づくりのための内政には文字がなくてはならない上に、魏などへの外交文書が絶対に必要となり一挙に日本語表記を進ませることになる。二世紀の古墳の主は自らの名前を漢字で表現する期待はあるものの機は熟さず、三世紀になって日本語を漢字で表す翻訳が始まる。まず、和語表記の試みから始まり、混交体や漢語のままの日本語ができてくる。以後、公文書は漢語で書き、一方、地域の伝承や万葉の歌など奈良から平安時代にかけて、本当の気持ちの表現をするために季節感と機微とを基調とした感性を表わす和語を大事にして、和歌とかな文字は漢語の硬質性を補って、日本語は数を増す。

和語は耳に慣れ親しんだ日本語そのものであり、雅語として日本的美意識を表現するべく発展する。あはれ・うるはし・心・調べ・まこと・やまいなどの和語、はなかたみや青柳の糸などの歌詞は普段着的できめ細やかな様態や人間心理を収めきっている。雅語としての「歌詞」は本来の意味から中身を変化させ、語彙の幅を広げ、生活を豊かにさせてきた。雅語の美意識や歌心の享受は人間性回帰につながることは間違いない。

三　教材としての駒村屋板刻「屋満とことば」

あき津志海とハ　　・日本の名奈り

「あきつしま」と読み、「日本の名なり」と意味を説明している。

あ川（濁点）まぢ　　・ひ可（濁点あり）しのミちをいふ

「あづまぢ」は「東路」と書き、東国へ通じる道をいう。「ひがしのみちをいふ」とは「東の道をいう」である。

古しぢ　　・ふ流さとのみちをいふ

「こしぢ」は、越し路と書き、本来は北海道の古称、一方、北陸道へ行く道を

もさす。しなさかるこしぢをさして、などと詠まれている。「ふるさとのみちをいふ」という説明は意味の範囲を広げて解釈している。

0　むば多ま　　・よ流をいふなり

「むばたま」は、「ぬばたま・むばたま」をいい、射干玉と書く。ひおうぎの丸くて黒い種を言う。「ぬばたまの」は、黒き、夜、夕べにかかる枕詞。

次の行に、むばたまとは「ゆめをいふなり」はとても楽しい。

0　ぬば玉　　・ゆめをいふ

く春（濁点）のうら風　　・えみをいふ

「くずのうら風」葛は秋の七草の一つ、つる草の葉は大形で風によく裏返る。

「えみをいふ」は、「笑みを言う」であり、つたのはの裏返りを、よく笑うさまとして擬人化したのであろう。

0　志き多へ　　・満くらをいふ

「しきたへ」とは「敷妙」と書き、寝床に敷く布や敷布団である。「しきたへの」は、よるの衣に係り、枕、袖などにもかかる枕詞である。

「まくらをいふ」は「枕を言う」のとおり。

をち古ち　　・とをくち可記をいふ

「をちこち」は遠近・彼方・此方と書く。意味はここかしこ。

「とおくちかきをいう」は、まさに遠く近きである。をちこちのたづきも知らぬ山中に（古今集）のように、ここかしこ見当もつかぬ山中にという意味。また、将来と現在という意味もある。ま玉つくをちこち兼ねて結びつる我が下紐の解くる日あらめや（万葉集）真玉つくは、「を」にかかる枕詞

志ののめ　　・明け可多をいふ

「しののめ」東雲と書く。夜明け方をいい、「あけかたをいふ」のとおり。

しののめの別れを惜しみなどと使われる。

0　春みそめ　　・ゆう遍（濁点あり）をいう

「すみ染め」と読み、墨染めと書く。意味は黒く染めること。「墨染めの」は、夕べ、暗しなどにかかる枕詞になる。「夕べをいう」という意味は、暗くなる、夕方になる意。

たそがれど記　　・ゆふぐ連の事奈り

「たそがれ時」　　・意味は「夕暮れのことなり」

おき能うはかせ　　・身にしむをいふ

「沖のうわ風」意味は「身にしむ」

志のすす　　・ほにいでたるをいふ

0　む无れ木　　・人に志られぬをいう

「むもれ木」は埋もれ木のことで、世に捨てられて省みるものがない例えをいい、「人に知られぬをいう」という意味。「埋もれ木の」は、あらはるまじ、知れぬ、したにかかる枕詞

0　あしひき　　・山をいふ

*　山保ととぎす　　・尾とつ連をき可はやとの事

「山ホトトギス」時鳥のことであり、ほととぎすは「とば」にかかる枕詞

「おと連れをきかばや」は、ホトトギスの訪れを示す鳴き声を聞きたいものだということ。転じて人の訪れもいうだろう。

はつるよ　　・月なきこと

多ちまふべくもなし　　・ものとふ事をいふ

「たちまふべくもなし」の、たちまふとは立舞ふとか、世の中に立ち交わるという意味。「ものとうこと」とは、すべきことを問へという意味になる。

げんじの御歌に

ものおもふたちまふべくもあらぬ身を

そでうちふかし心しるきに

0　あさ可（濁点）ほの者奈　　・くれをまた須きゆるをいう

「あさがおの花」　　・くれを待たずに消ゆる

「あさがほ」とは今のキキョウの花のことで一日でしぼむ。「あさがほの」は、穂にはさき出ぬ（表には現れぬ）、年さえこそにかかる枕詞。「くれをまたすにきゆる」は夕暮れを待たずに消えてしまうということ。自然の摂理とはかない人間とを重ねる日本人好みのことばである。

夜かほのけふり　　・たたぬこひにくゆる

見ね能志ら雲　　・よそに見て春ぐ流をいふ(よそにみてすぐる)

定家卿の歌に

よそにのみ三てややみなんかつらきの

たかまの山のみねの志らく毛

「峰の白雲」のみねとは、山の頂である。「よそに見てすぐるをいう」に言う「よそ」は直接に関係がないという意味でそのように過ぎることをさす。

雲井の者し　　・可よひ奈紀をいふ

「雲井の橋とは」きわめて高いところの橋という意味。「通ひなきをいう」通るものもいない、人も通ってこないという意味になる。

せぜのいわなみ　　・わきかへりものをいふ

身を君流あめ　　・なみだをいう

「身をきる雨」と読み、意味は「涙を言う」

つらぬく玉　　・かず志らぬこと「数知らぬ」

志らきく　　・うつろひやすきをいう。「移ろい易き」

婦じのけふり　　・たえぬおもひ「耐えぬ思い」

いな徒（濁点）ま　　・はかなきこと「儚きこと」

「いなづま」は稲妻でいなびかりをいう。「はかなきこと」の意味は、ほんのちょっと、とるに足りない、頼みにならぬ、という意味。

人の多め　　・いつ王りをいふ

「人のため」と読み、その意味を「いつわりをいう」としている。「いつはり」とは、うそのことである。人のためと言うのはうそということ。

＊あ可年さ春　　・日能いづるをいふ

「あかねさす」と読み、意味は日、昼、紫野、照る、月、君が心、にかかる枕詞。茜色の略でもある。「ひのいづるをいふ」は、茜色した夕焼けの空のような赤い色をした太陽が出るという意味。

あをやぎのいと　　・み多れや春紀をいふ

読み「あをやぎのいと」　　意味「乱れやすきをいう」

多満のを　　・いのちをいふ

「たまのお」たまとは魂のこと。動物の肉体に宿って精神活動を営むもの。

「いのちをいう」は、魂と肉体からなるまさに生命をさす。

よぶことり　　・さ流の事なり

「よぶことり」は呼子鳥と書き、カッコウのこと。大和には鳴きてか来たらむ呼子鳥(万葉集)などと詠まれ、意味の「さるのことなり」猿と説明している。

せみ丸の句耳（蝉丸の句に）

○おちこちのたつきも志らぬ山中に

おほつかなくもよぶことりかな

く多かけ　　・に者とりの事をいふ

「くたかけ」は「腐鶏」と書く、鶏をののしって言う語である。例えば、忌々しい鶏が早く起きて鳴くものだから思う人が帰ってしまうよ。

たんに、鶏の意味もあり、「にはとりのこと」という意味はそのままである。

いせものがたりの歌に

○よもあけはきつにはめなてくたかけの

またきになきてせなをやりつつ

せな　　・男の事をいふ

介ふりくらへ　　・多可（濁点）ひ乃思ひふ可記事

「けふりくらへとは」　気振り（そぶり）くらべである。

「たかいのおもひふかきをいふ」とは「互いの思い深きを言う。」のこと。

○多ちそひてみえやしてましうきことを　　「立ち添ふ」寄り添う

おもひ乱るるけふりくらへん

あすか川　　・変りやすき事をいふ

○世の中を何にたとへんあすか川　　（世の中を何に例えんあすか川）

きのふの婦ちわけふのせとなる　　（昨日の渕は今日の瀬となる）

三王の山　　・たつ年天とへといふこと

「みわの山とは」「たつねてとへといふこと」

み王の明神の御歌に

○恋しくはたつねてもこよわが屋どを

見王の山もとすぎたてるかど

ありあけ月　　・つ連な記事をいふ

「ありあけの月」陰暦の十六日以後の月が空に出ているままで、夜が明けようとしている。今来んといひしばかりに長月のありあけの月を待ち出でつるかな（古今集）

「つれなきことをいふ」空に出ていて変わらないという情況から、何の変化もない、変化がない、よりつけないという意味になる。

ことひきくさ　　・ま川をいう

「ことひきくさ」は琴弾き草と書き、松の異名である。

意味である「まつをいう」は、風に鳴る松風の妙音を奏でる松である。

ちり能しほがま　　・近けりとも逢わぬこと

かたみくさ　　・懐かしきこと

つちのふで　　・つくし

0　たらちめ　　・者はのことをいふ

「たらちめ」垂乳女とかき、母のこと。「ははのこと」という説明どおり。

「たらちね」は「垂乳根」であり母をさす、しかし、たらちめの対としての父という意味もある。

「たらちねの」は母、親にかかる枕詞である。「たらちを」は、「をとこをいう。」つまり、男のこと。

う多丶禰　　・恋しき人を待ち可年多る事

「うたたねとは」「恋しき人を待ちかねたること」

仮寝、転寝はうとうと眠ること。うたたねに恋しき人を見てしより夢ちょうものもたのみ染めてき（古今集）。夢は正夢ということで恋しい人を待ちかねる吐息が聞こえそう。

以下は、現代仮名遣いで読みやすく解説を加えないで記述する。

あち年	・眠くなりてぬる（ねる）こと
三ほの松はら	・奥深いこと
あふ坂山とは	・せきとめんという心
浮き草	・浮かれたること
ながるる水	・定めなきこと
そばのかけはし	・再び通うこと
＊あつさゆみ（梓弓）	・心引くをいう
みかつき	・宵に会わんということ
もちつき	・十五日の月
いざよい	・十六日の月
たちまちの月	・十七日の月
いまちの月	・十八日の月
ふしまちの月	・十九日の月
しのぶもじずり	・思い乱るること
ほにいづる	・恋の色あらわれたること
おぐ流（る）ま	・めぐり合わんとのこと
おきこぐふね	・契り定めぬをいう
わがせことり	・妻のこと
まさきのかつら	・懸けて祈らんということ
しめなわ	・懸けてたのまんということ
はつゆき	・待ち遠しいこと
すみよし	・まつも久しということ

○われみても久しくなりぬ住吉の岸のむめまつ幾夜へぬらん

まつのね　　千載集の歌に

○わがこひはいわまにまきしまつのたね

いまわねさせよ千代とちぎらん

きよみがせき　　・涙かかる袖をいう

古今の歌に　　(実際は詞花集)

むねはふじ袖はきよみがせきなれや

けふりも波も立たぬ日はなし

筧の水　　・ただただ鳴る

ぬさ　　・神へ祭るもの

ぬさはなしこれを手向けのぬさとせん

けづれば髪もなびくとぞきく

はなたちばな　　・昔をしのぶこと

しらなみ　　・ぬす人をいう

ねやのあふき　　・かたみをいう

おみなえし　　・人のくねるを言う(くねるとは、ひがむ、愚痴をいうこと。)

ひと木のまつ　　・頼りなきこと

あやめもしらぬ　　・涙のしけきをいう

あやめ草　　・菖蒲のこと

あけくれない　　・心なしという心なり

ぬれきぬ　　・浮き名のたつをいう

まろきはし　　・ふみかえすをいう

かかみやま　　・面影見んということ

0　かたいと　　・あわぬ事

(片糸)は、より合わせる前の糸。「片糸の」は枕詞

こしばがき　　・たちくれたるをいう

小柴垣は低い柴の垣根

よこ雲　　・ひきはなれたるをいう

横雲は明け方に東の空にたなびいている雲

のきばの草　　・人を悪く申す心

おにのしたくさ　　・物忘れぬこと

心草植えてみれば人を忘れぬと申すこと

とまり舟　・繋がれたるをいう

山とりの尾　・へだてある事をいう

はまちとり　・あらを見ぬこと

しかまのかちん　・あいそめる事

しかまとは陸奥のくの市を申すなり美しきかちんを染めてかるによりて申すなり。「かちん」は搗飯とかく。餅のこと。かち色という意味もある。

たなはた　・まれにあうこと

あたちかわら　・おそろしきこと

花に鳴くうぐいす　・歌を読む人を申すなり、また、水に住むかわずまでおなじ心なり

もずのくさくき　・人をたのむをいう

くさぐきとは「草潜」と書く。気の枝の茂みにくぐりはいって見えないこと

はかざればもずの草茎見えずともふりはみゆらん君があたりを

ひたちおび　・契りを結ぶを言う

ものの縁　・人の縁という心なり

えにしとは　・もの妬みすること

ふしたけ　・たえぬ思い

はつうぐいす　・めずらしきをいう

逢坂山　・またあいみんという心

あまのはしたて　・今だあひ見ぬをいう

「天の梯立」という意味、天にかける梯子はおぼつかないところから、「いまだあいみぬ」は、今だに出合うことがないなどとしゃれた。

まつくれ　・つ連なき人をいふ(つれなき人)

さころも　・夢に多に見ぬをいう(ゆめにだにみぬ)

「さこもろ」は狭衣と同義。「夢にだに見ぬ」

なごの橋(なごとは、小石でするお手玉)　・朽ち果てぬをいう

春えの松山　・奈み多いろうす紀をいう

「すえの松山」は、清原元輔の　契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山浪こさじとは　と詠われた。袖をしぼるほど涙で交わす、末の松山を越させないほどの固い約束の歌だが、「涙いろうすき」とは、その逆の意味になるのだろう。

しののめすすき　・ほのかにみるよという心

はながたみ（花筐）　・語らひ

花を摘んで入れる篭。さまざまな話題に花が咲いている。

＊くさ満くら　・多び年をいう

「草枕」とはもとの意味は草を枕に眠ること、結ぶ、ゆふ、かり、つゆ、たごにかかる枕詞である。多び年は「旅ね」と読み旅眠のこと。

みつの玉　・つましきをいふ

「みつのたま」「つましきをいう」

もちづき　・ますかがみをいう(真澄鏡、真澄の鏡の略)

増鏡見る影さえへにくれぬと思えば(古今集)

多ち者な　・婦かきこひをいう

「橘」はこうじみかんであり、薫り高い白い花をつける果樹。この意味が「深き恋」となるのだろう。

むらすすき　・もの寂しきをいう

身をしるあめ、　・涙をいう

あしわけふね　・心苦しきを言う

ひけ三川　・つつむおもひをいふ

読み　「ひけみつ」つつむは、「裹む」と書く。隠す、はばかる、用心するなどの意味があり、この場合は隠す思いである。

おのおの親あればつつみて言ひさしてやみにけり。(勢語)

＊ま紀はしら　・そのゆ可りむつましきをいう

まきはしらは「真紀柱」と書く。ひのきの柱のこと。「ふと」にかかる枕詞。

例として「真紀柱作る太き心はありけれど」万葉集。「ゆかり」は縁、縁戚の意味であるから、縁に連なるものの仲がいいことということになる。

奈尓はのあし　　・危う記い恵をいふ

「難波の芦」は伊勢の浜荻、物の名前が所によって変わることをいう語で、草の名も所によって変わるなり難波の芦がある。

「危うき家」と考えていいいだろう。

山とりのお　　・一人ねをいう

いりふ年　　・いまにあはんということ

いりへねとは、「入り船」であり意味は港に入る船である。従って、今に来るであろう人、待ち人と会えることと洒落た。

そらゆく月　　・めくりあ者んといふこと（巡り会わんということ）

つるの毛ころも　　・静かに会わん

あきの者紀　　・王り奈紀事をいう

「秋の萩」は「わりなきこと」。「わりなき」は名詞。眉目形・心ざま、優にわりなき候（平家物語）に使われる。意味は格別だ、すぐれている。

きミ可へる　　・あはんという心

ゆく水　　・お无ふ事(思うこと)

ゆく水は流水のことで、ゆく水にかず書くよりも（勢語）の例がある。「思う」とは、愛するとか、心配するなどの意味がある。

満とのあをやき　　・としふれともあはぬをいう

「まとのあをやきの」「としふれとも」の年経（ふ）は年月がたってもという意味で、「色も香も同じ昔に咲くらめど、色経る人ぞ改まりける」（古今集）がある。この歌は桜も読み込んでいる。

ないしき　　・都のこと

うちしき　　・いなかのことをいう

「うちしき」とは、打敷と書き、布製の敷物仏壇の前の香炉などの敷物という意味である。いなかのこと。「ないしき」は都のこと

れんりのえだ　　・古きちきりをいふ

連理は一つの枝が他の木の枝に連なって木理が相通ずることであるから、意味も昔からの契りをいうことになる。

うぢ能者しひめ　　・むなしき事をいう

「宇治の橋姫」は、橋を守る女神、京都宇治橋にいるという伝説がある。たまひめとも言う。今宵もや吾を待つらん宇治の橋姫（古今集)。むなしきとは転じて架空とか、はかないなどをいうのであろう。

志とみの風　　・ゆふさりあはんとのこと

「しとみの風」の蔀のことで、軒の日よけ、雨よけの戸であり、「ゆうさりあわん」のゆふさりとは夕べになることであるから、夕方に会うということであろう。

まつさく者奈(まつ咲く花)　　・心く流しきをいう(心苦しきを言う)

うつつ山　　・ほのかに見ゆる

さのふなはし　　・人を恋ゆる

すみがま　　・こがるる

なごりのはし　　・おもいこがるる

ほすすき　　・色にでたるをいう

しばがき　　・書けどかかれぬ文

ふたえころも　　・重ねて来い

はなかたみ　　・片思い

四　歌詞の中学生への指導

やまと言葉は生活語としての音声語であり、日本語創造の源流であり、全日本語のいわば枕詞のような存在であるといえる。この和語である雅語としての歌詞の意味を知り和歌の創作にも生かしていく中で美しい日本語に触れて感性を練る指導には段階がある。

1　和語の意味を理解しつつ等質に和語を仲間わけする段階

例えば、もとの意味から分類する例として、①（植物）あさがお・ことひきくさ・あきのはぎ・たちはな。②（動物）くたかけ・ホトトギス。③（自然現象）あかねさす・しののめ・みをきるあめ・いざよいのつき。④（人間）むもれき・たらちね・あふさかやま・あつさゆみ。⑤（　生活）すみよし・おきこぐふね・あまのはし・くもいのはし・しのぶもじづり・ほにいずる。⑥（旅）くさまくらなどのように分類表を作り意味を添える。

また、もとの意味から変化した内容を基準にして分ける方法がある。上記でいうと、「ぬばたま」は植物であるが、意味は転じて夢を表すから、生活とか人間等の項目に入れる。これは、生徒の分類に任せればいいが、分類は理解度をみる上で大切になる。

2　枕詞の意味用法をつきつめる段階

むばたまの・しきたへの・むもれき木の・あつさゆみ・かた糸の・くさまくら・巻き柱。などをまず学び、ついで好きな枕詞を集める。その枕詞がつかわれる和歌を集め、絵と文字でカルタにして楽しむ。

3　好きな歌詞を決める段階

とりあげてほしい和語(歌詞)

あきはしま・をちこち・しののめ・すみそめ・おきのうわかぜ・たちまうべくもない・くもいのはし・みをきるあめ・あおやぎのいと・よぶことり・くたかけの・みつの山・ありあけ月・ことひきくさ・しのぶもじづり・きよみがせき・あやめもしらぬ・かがみやま・かたいと・花になく鶯・もずのくさくき・初鶯・あまのはしだて・しののめすすき・くさまくら・はながたみ・むらすすき・みをしる雨・ひけみ川・まき柱・連理の枝・蔀の風。等の意味を調べ、その言葉を使った和歌や古典の文を収集し、感想を書く。

4　和歌を創作する

①　今まで学習した雅語を使って美しい情景、友や家族の優しさ、事件やジーンとしたこと、一言言いたいこと、自分をとらえて離さない気落ち等を色々言い表してみる。

②上記の雅語の意味を参考にして、気持ちや考えや情景を和歌として歌ってみる。

む す び

和語(特に歌詞)を教育に生かすことについて若干の提案を試みた。中学校では、人間の一番根底にある文化を成り立たせている古典の享受はさびしい限りであるので、それを成り立たせる日本語の源流としての詞をもっと味わうことが必要になる。やまと言葉そのものや古文を読むこと、和歌を作ること、俳句を作ること、女性言葉の研究などは学校教育で行われるべきである。社会教育も若い層の参加を工夫し、物語だけでなく言葉と人間の講座をもっと仕組むべきであると思われる。

日本人は類いまれな民族であるが、最近方向を見失いとげとげしい。いまこそ高い精神性を保持しつつ土着性と高尚さをもって織り成す歌詞などを素材にして学ぶことによって原点に立ち返ってものを考えながら生活のなかで、夕焼けの美しさをゆっくり見る余裕をもち、人間関係において惻隠の情を養いたいものである。それらの総合が機能して人は人に成長すると考える。

参考文献　古語辞典金田一京助監修　三省堂
屋満と言葉　馬喰町　　駒村屋　板版